

フェイズ指定部からの抜き取りに関する再考

黒木, 隆善
九州共立大学 : 講師

<https://doi.org/10.15017/1909533>

出版情報 : 九大英文学. 58, pp.119-146, 2016-03-31. 九州大学大学院英語学・英文学研究会
バージョン :
権利関係 :

フェイズ指定部からの抜き取りに関する再考*

黒木 隆善

1. はじめに

(1)に示したように、英語では一般的に、主語内からの wh 句の抜き取りが許されない。

(1) *Who did stories about *t* terrify John? (Chomsky (1973: 275))

この現象は特に主語の島(subject island)効果と呼ばれ、Ross (1986)以降、生成文法理論の変遷とともに様々な分析が試みられてきた。例えば、拡大標準理論(Extended Standard Theory)の枠組みを想定した Chomsky (1977)では、下接の条件(Subjacency Condition)による分析が試みられ、また統率・束縛理論(Government and Binding Theory)の枠組みに位置する Chomsky (1986)においては、障壁(barrier)の概念を用いて下接の条件を捉え直し、島の効果の全容を捉える分析を提案している。また、Chomsky (1993, 1995)に始まる極小主義の枠組み(Minimalist Program)以降では、Takahashi (1994)や Stepanov (2007)における連鎖の均一性(Chain Uniformity)と最短移動(Shortest Move)を用いた分析、Uriagereka (1999)において、多重書き出し(Multiple Spell-Out)に起因する分析が挙げられる。

特に近年の、「言語は音と意味のインターフェイス条件に対する最適解である」という強い極小主義の命題(Strong Minimalist Thesis: SMT)に沿った極小主義の枠組みでは、Chomsky (2008)において、フェイズ(phase)指定部の特性を利用した分析によって主語の島効果の説明がなされている。¹

本論では、Chomsky (2008)で論じられた、フェイズ指定部の特性を利用した分析による主語の島効果の説明は、理論的にも経験的にも問題があると主

張しつつも、Chomsky (2014)におけるフェイズの枠組みに沿った形で捉えなおすことにより、提示した理論的・経験的問題が解決可能となり、フェイズ指定部の特性を利用した分析そのものは十分支持され得るものであると論じる。また、その過程において、当該分析を用いた主語の島効果の説明に関しては改めて再考が必要であることを論じ、Chomsky (2008)における提案とは異なる、独立した一般化によってその効果を捉える試みを講じる。

本論の構成は以下のとおりである。まず2節において、Chomsky (2008)で論じられた、フェイズ指定部の特性を利用した分析と、それによる主語の島効果の説明を概観する。次に3節において、Chomsky (2008)の議論における理論的問題点と、Gallego and Uriagereka (2007)や Gallego (2010)において指摘された経験的問題点を提示する。4節では Chomsky (2013, 2014)における標示のアルゴリズムを用いたフェイズ理論を概観し、特に Chomsky (2014)において提案された新しいフェイズ理論を Chomsky (2008)の分析に援用することによって、3節において指摘した理論的問題点と経験的問題点を解決できることを論じつつも、主語の島効果自体は説明できないことを主張する。5節では、4節における提案のみでは説明できない主語の島効果が、Chomsky (2014)における分析の修正と A'移動の特性により導き出せる一般化によって説明できる可能性を示唆する。6節で本論の帰結を提示する。

2. Chomsky (2008)

Chomsky (2000, 2001)以降、統語操作を行う最小の単位として、フェイズが提案されている。フェイズは一般的に C と v^* が主要部となり、計算操作の負荷を軽減するために、フェイズが形成されると、それぞれの補部に転送(Transfer)操作が適用される。そのため、より上位の要素から要求される操作は、転送された補部に対しては適用されないというフェイズ不可侵条件(Phase-Impenetrability Condition: PIC)を有する。

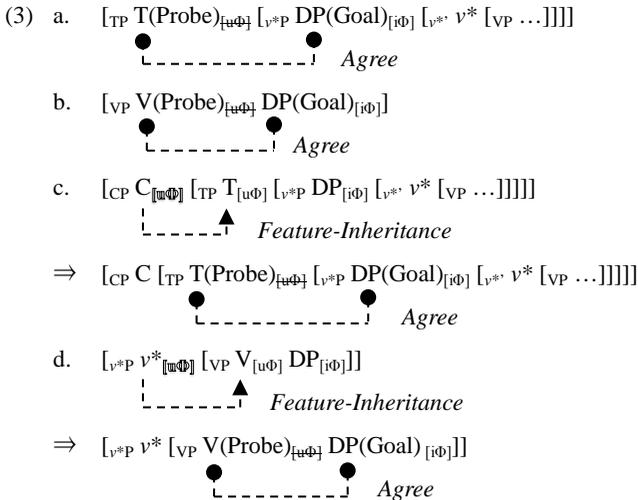
(2) *Phase-Impenetrability Condition* (Chomsky (2000: 108))

In phase α with head H, the domain of H is not accessible to operations outside α , only H and its edge are accessible to such operations.

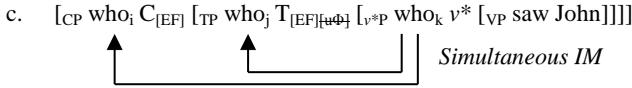
SMT の考え方を中心とした議論を展開している Chomsky (2007, 2008)におい

では、従来までのフェイズの枠組みや併合(Merge)と移動(Move)の捉え方、フェイズ指定部(phase edge)の特性に対し、新たな提案や想定を行っている。

まず、フェイズの枠組みに関して概観する。Chomsky (2007, 2008)以前までのフェイズの枠組みでは、解釈不可能素性をフェイズ主要部以外の主要部も有しており、それらが探索操作を独自に行っていたが、Chomsky (2007, 2008)以降では、全ての操作がフェイズ単位で行われる、つまり、フェイズを形成した段階で探索操作等が駆動されると論じている。一致(Agree)操作を例に挙げると、従来は(3a, b)のように、TやVなどの主要部に解釈不可能なΦ素性が想定されており、それらの素性を有する主要部が探索子(probe)となって、探索子のc-統御領域内にある解釈可能な一致の対象(goal)を発見し、一致を引き起こすと想定されていたが、Chomsky (2007, 2008)では、(3c, d)に示すように、フェイズ主要部が前述の解釈不可能素性を有しており、フェイズ主要部が統語派生に併合された際に、解釈不可能素性がTやVに継承され(Feature-Inheritance)、(3a, b)と同様の一致操作が生じると想定している。²

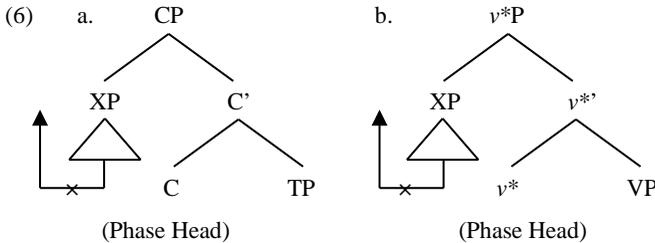


次に、併合と移動の捉え方に関して概観する。Chomsky (2007, 2008)では、統語構造を構築する基本的な操作である併合操作は、(4a)に示したように、ある2つの要素の集合を作る操作であり、端素性(edge feature: EF)と呼ばれる



(cf. Chomsky (2008: 149))

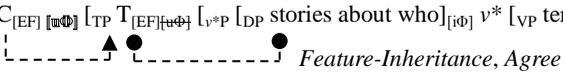
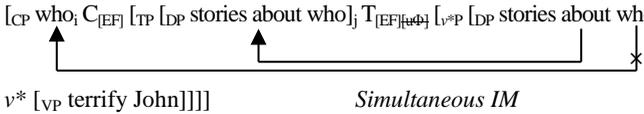
最後に、Chomsky (2008)では、フェイズの指定部の特性として、フェイズ指定部内からの要素の抜き取りが許されないことを主張している。その理由として、Chomsky (2008: 147-148)において、局所性(locality)の条件に還元する可能性を示唆している。例えば、(6a, b)において、XP 内部の要素を移動させる場合には、当該フェイズよりも上位のフェイズ単位における探索操作が必要となる。しかしながら、上位のフェイズ単位における操作段階では、当該フェイズにおける派生の操作は既に完了しているため、上位フェイズ単位の探索操作を行った際、フェイズ指定部内の要素を見つけるためには、より埋め込まれた深い位置を探索することとなり、指定部全体を探索操作の対象とする際に比べ、コストがかかる。それゆえ、フェイズ指定部からの抜き取りは許されないと論じている。



(cf. Gallego (2010: 51))

これら Chomsky (2007, 2008)における一連の提案や想定を踏まえ、(1)で挙げた主語の島効果に関して考えてみよう。(1)の事例は(7a)として再掲している。前述の(5)に挙げた事例と同様、(7a)における主語 DP は、(7b)に示すように v^*P フェイズの指定部に基底生成されており、フェイズ主要部である C が併合した段階で解釈不可能素性が T へと継承され、T が主語 DP と一致操作を引き起こす。その後、(7c)に示す通り、T の EF によって、主語 DP 全体が IM 操作の適用を受けて TP 指定部へ移動し、同時に C の EF によって、主語 DP 内の wh 句 *who* が IM 操作の適用を受けて CP 指定部へと移動する。しか

しながら、前述の(6)で示した議論を踏まえると、*who* の CP 指定部への IM 操作の適用は、フェイズ指定部内に埋め込まれた位置からの抜き取りとなるため、抜き取りが許されないと説明できる。

- (7) a. *Who did stories about *t* terrify John? (= (1))
- b. $[_{CP} C_{[EF]} [_{TP} T_{[EF]} [_{v^*P} [_{DP} \text{stories about } who]_{[i\Phi]}] v^* [_{VP} \text{terrify John}]]]]]$

- c. $[_{CP} who; C_{[EF]} [_{TP} [_{DP} \text{stories about } who]_j] T_{[EF]} [_{v^*P} [_{DP} \text{stories about } who]_i] v^* [_{VP} \text{terrify John}]]]]]$


このように、Chomsky (2008)では主語の島効果をフェイズ指定部からの抜き取りに還元している。しかし、この提案が支持されるためには、実際に主語 DP 内の *who* が v^*P 指定部から抜き取られていることを示す必要がある。そのため、Chomsky (2008)では以下の事例を証拠として提示している。

- (8) a. *Of which car did [the driver *t*] cause a scandal?
 b. Of which car was [the driver *t*] awarded a prize?
 (cf. Chomsky (2008: 147))
- (9) a. $[_{CP} C [_{TP} T [_{v^*P} [_{DP} \text{the driver of which car}] v^*\text{-cause} [_{VP} t_{\text{cause}} \text{a scandal}]]]]]$ (= (8a))
 b. $[_{CP} C [_{TP} T [_{VP} v\text{-awarded} [_{DP} \text{the driver of which car}] [_{VP} t_{\text{awarded}} \text{a prize}]]]]]$ (= (8b))

(8a)は他動詞の主語からの抜き取りであり、(8b)は受動化された主語からの抜き取りである。表面上はどちらも TP 指定部に生起する主語位置からの抜き取りのように見えるが、Chomsky (2008)によれば、(8a)のみが非文法的であると判断している。(8)の主語 DP と *wh* 句が移動する前の派生は、それぞれ(9)のように記述できる。(9a, b)を比較してみると、(8a)の主語 DP は他動詞の主語であるため、(9a)のように v^*P 指定部に基底生成される一方で、(8b)の主語 DP は間接目的語位置に生起する要素が受動化されて主語 DP になっているため、その生起位置は VP の指定部となる。この対比が正しいとするならば、Chomsky (2008)の主張する通り、フェイズの指定部に生起する主語 DP 内か

らは抜き取りが許されず、結果として主語の島効果が現れると説明できる。

しかしながら、本節で概観した Chomsky (2008)の議論に関しては、理論的・経験的問題点が先行研究などを通して挙げられている。次節において、Chomsky (2008)の理論的問題点と経験的問題点を概観する。

3. Chomsky (2008)の理論的・経験的問題点

3.1 理論的問題点

2節で概観したように、Chomsky (2008)では、操作がフェイズ単位で生じると想定されている。そのため、前節の(5a)で提示した *Who saw John?* といった wh 主語を有する疑問文の場合には、まず v^*P の指定部に wh 主語が生起し、次に主要部 T とフェイズ主要部の C が併合された後、wh 主語が TP 指定部と CP 指定部への IM 操作の適用を同時に受けるとされていた。

この IM 操作の同時適用は、Chomsky (2008)の主語の島効果の説明にとっては重要な役割を担う。というのも、(10a)に再掲した主語の島効果は、(10b)に繰り返したように、 v^*P フェイズ指定部からの抜き取りが許されないというフェイズ指定部の特性に還元しているからである。もしこの IM 操作の同時適用が想定されていなければ、(10c)のように、IM の局所性を考え、一旦主語が TP 指定部へ移動し、C の EF が主語の内部にある *who* を抜き取るという派生も考えられる。しかしながら、(10c)の派生では、*who* がフェイズ指定部内からの抜き取りではないため、事実と反し、抜き取りが許されると予測することとなる。つまり、Chomsky (2008)における主語の島効果の分析には、IM 操作の同時適用が前提として必要不可欠となるわけである。

(10) a. *Who did stories about *t* terrify John? (= (7))

b. $[_{CP} \text{who}_i; C_{[EF]} [_{TP} [_{DP} \text{stories about who}]_j T_{[EF][u\Phi]} [_{v^*P} [_{DP} \text{stories about who}]_i v^* [_{VP} \text{terrify John}]]]]$ (= (7c)) *Simultaneous IM*

c. $[_{CP} \text{who}_i; C_{[EF]} [_{TP} [_{DP} \text{stories about who}]_j T_{[EF][u\Phi]} [_{v^*P} [_{DP} \text{stories about who}]_i v^* [_{VP} \text{terrify John}]]]]$

しかしながら、IM 操作の同時適用には、理論的問題がある。それは、TP 指定部と CP 指定部への IM 操作の同時適用は、C が併合された後でなければ生じない、つまり、IM 操作の同時適用を行うためには、TP 指定部への IM 操作が反循環的(counter-cyclic)であることを許さなければならないということである。この反循環的な TP 指定部への移動に関しては、Epstein, Kitahara, and Seely (2012) (以下 EKS (2012))において、Chomsky (2007, 2008)の分析の問題点として指摘されている。EKS (2012)では、(11a)が、Chomsky (2007, 2008)の分析に従い、(11b)の派生過程を経て、(11c)のような TP 指定部への主語の IM 操作を行うためには、置換(replacement)のような過程を組み込む必要があると論じている。

(11) a. Bill ate rice.

b. $[_{CP} [C [_{TP} [T [_{v^{*}P} \text{Bill} [v^{*} [_{VP} \text{ate rice}]]]]]]]$

c. $[_{CP} [C [_{TP} \text{Bill}_i [T [_{v^{*}P} \text{Bill}_i [v^{*} [_{VP} \text{ate rice}]]]]]]]$

(cf. Epstein, Kitahara, and Seely (2012: 255))

(11b, c)において、それぞれ C と併合するその補部を見ると、(11b)の派生では、TP に指定部が存在しない形の補部($T^1 = [T [_{v^{*}P} \text{Bill} [v^{*} [_{VP} \text{ate rice}]]]]$)と C が併合操作を行っているのに対し、(11c)では、Bill の IM 操作によって TP 指定部が新たに生じた形の補部($T^2 = [\text{Bill}_i [T [_{v^{*}P} \text{Bill}_i [v^{*} [_{VP} \text{ate rice}]]]]]$)に対して C が併合しているということになる。このとき重要なことは、TP 指定部の有無によって、当然補部となる TP の統語構造が異なるということである。従って、(11b)の派生結果を算出するためには、(12a)のように C と T^1 のような補部が併合している必要があり、(11b)の派生結果を算出するためには、(12b)のように C と T^2 のような補部が併合している必要がある。つまり、(11b)から(11c)の派生結果を算出するためには、一旦 C が補部 T^1 との併合を行い、その後補部 T^1 を補部 T^2 と置換するような操作が必ず必要となるのである。

(12) a. Merge (C, T^1) \Rightarrow {C, T^1 } (= (11b))

b. Merge (C, T^2) \Rightarrow {C, T^2 } (= (11c)) (cf. *ibid.*)

このように、Chomsky (2008)におけるフェイズ指定部の特性を用いた主語の島効果の分析を採用すると、TP 指定部への IM 操作が反循環的なものとなり、結果的に EKS (2012)が指摘するような、置換のような過程を新たに導入

する必要が生じるという問題が発生する。⁵

3.2 経験的問題点

Gallego (2010)では、Gallego and Uriagereka (2007)に基づき、Chomsky (2008)で提案された主語の島効果の説明に対する経験的問題点を提示している。まず、2節のChomsky (2008)において提示された(13)の例の文法性の判断に関しては、Gallego の調査によれば、(13a)は、実際には完全に非文法的であると判断し難く、逆に(13b)は完全に文法的であると判断することが難しいと論じている。

- (13) a. *Of which car did [the driver *t*] cause a scandal? (= (8a))
b. Of which car was [the driver *t*] awarded a prize? (= (8b))

これに加え、Stepanov (2007: 85)では、(13b)と同様の、受動態主語からのwh句の抜き取りは、容認性が低い事例として提示されている。

- (14) *?Who was a friend of *t* arrested?

Stepanov (2007)や Gallego (2010)が示した文法性の判断を考慮に入れると、Chomsky (2008)で提示された(13)の事例に関しては、更なる慎重な再考が必要となる。⁶

また、Gallego (2010: 57-58)では、(13)の対比における問題とは異なる、更なる経験的問題となる事例として、Uriagereka (1988: 118)のスペイン語とBroekhuis (2005: 64)のオランダ語の主語からの抜き取りの対比を提示している。

- (15) *Spanish* (Gallego (2010: 57))

- [_{CP} De qué conferenciantes; C te parece que ...
of what speakers CL-to.you seem-3.SG that
a. ...?[_{TP} me van a impresionar [_{v*P} [las propuestas *t*_i]]]?
CL-to.me go-3.PL to impress-INF the proposals
b. ...*[_{TP} [las propuestas *t*_i] me van a impresionar [_{v*P} *t*_j]]?
the proposals CL-to.me go-3.PL to impress-INF
‘Which speakers does it seem to you that the proposals by will impress me?’

(16) Dutch (*ibid*: 58)

- a. [CP Wat_i C hebben [TP er T [_{v*P} [t_i voor mensen] je moeder
what have-3.PL EXP for people your mother
bezocht]]]?
visited
- b. *[CP Wat_i C hebben [TP [t_i voor mensen]_j T [_{v*P} t_j je moder
what have-3.PL for people your mother
bezocht]]]]]?
visited

‘What sort of people have visited your mother?’

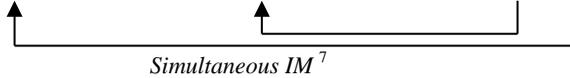
Gallego (2010)は、(15)や(16)に示されているように、スペイン語やオランダ語の他動詞文における主語は、*v*P* 指定部に基底生成されると想定している。もしこの想定が正しいのであれば、Chomsky (2008)の分析の反例となる。(15a)や(16a)に示されているように、*v*P* 指定部に主語がとどまっている場合、英語と異なり、表面上明らかに *wh* 句の抜き取りが *v*P* の指定部内から行われている。そのため、Chomsky (2008)の分析では誤って抜き取りが許されないと予測することになる。逆に(15b)や(16b)の事例は、表面上主語が TP 指定部へ移動しているため、フェイズ指定部からの抜き取りにならず、文法的であると判断されてしまう可能性がある。仮に Chomsky (2008)で採用された IM の同時適用を踏まえ、(15b)や(16b)の主語が *v*P* 指定部に存在している段階で C への IM 操作の適用を受けると想定したとしても、(15a)や(16a)との対比が生じる独立した理由が必要となる。

更に Gallego (2010: 59)では、*v*P* 指定部内の要素の抜き取りが許されないと論じる Chomsky (2008)の議論の反例として、Uriagereka (1988: 115)で報告されたバスク(Basque)語の目的語からの抜き取りの対比を取り上げている。通常、(17a)に示されるように、英語の非特定の(non-specific)な目的語内からの要素の抜き取りは許される。これは、Chomsky (2007, 2008)の分析に沿えば、(17a)の *v*P* 内の派生を示した(17b)から分かるように、目的語自体は少なくとも *v*P* 指定部への IM 操作の適用は受けないため、目的語は *v*P* 指定部には生起せず、フェイズ指定部からの抜き取りには該当しない。そのため、抜き

取りが許されると説明できる。しかしながら、バスク語では、(18a, b)の対比に示されるように、非特定の目的語であってもその一部を抜き取ることができない。

(17) a. Who_i did you see [a picture of t_i]? (Stepanov (2007: 80))

b. [_{vP} who_i [_{vP} you v* [_{VP} [_{DP} a picture of who]_j [_{v'} see [_{DP} a picture of who]_j]]]]]



(18) a. *[_{CP} Noren_i C ikusi ditu [t_i argazkiak] Jonek]?

who-GEN see AUX pictures-ABS John-ERG

‘Of whom has John seen pictures?’

b. [_{CP} [Noren argazkiak]_j C ikusi ditu t_i Jonek]?

who-GEN pictures-ABS see AUX John-ERG

‘Pictures of whom has John seen?’

バスク語の目的語位置に関しては更なる議論が必要ではあるものの、仮に Chomsky (2007, 2008)の議論に従い、バスク語の目的語も(17b)のように VP 内に基底生成された位置から VP 指定部と v*P 指定部へ、目的語全体と wh 句が同時に移動していると想定するならば、(18a)はフェイズ指定部からの抜き取りとは言えず、予測に反して文法的であると判断されるはずである。

本節では、Chomsky (2008)が提示した主語の島効果の説明を支持する証拠に関しては、少なくとも判断の揺れがあることに加え、他言語において、フェイズ指定部の特性に頼る分析では説明できない経験的証拠があることを論じた。とりわけ(13b)と(14)の文法性判断の差は大きく、更なる調査を必要とするため(註 6 参照)、本論では他言語における反例を以て当該分析に反する経験的証拠としたい。

4. 代案

4.1 Chomsky (2014)と理論的問題の解決

前節で挙げた Chomsky (2008)の提案に対する理論的・経験的問題点を解決するために、本論では Chomsky (2014)において提案されたフェイズの枠組みを

採用する。Chomsky (2014)では、Chomsky (2007, 2008)の素性継承のメカニズムや併合操作は2つの要素の集合であるという考え、Chomsky (2013)で主に議論された標示のアルゴリズム(Labeling Algorithm: LA)を踏襲することに加え、更なる議論の修正と拡張を行い、拡大投射原理(Extended Projection Principle: EPP)と that 痕跡効果(*that*-trace effect)説明している。⁸

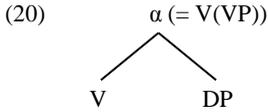
Chomsky (2014)のフェイズ理論を概観する前に、まず Chomsky (2013)で議論された LA を簡単に概観する。Chomsky (2013: 43)は、統語操作によって構成された統語構成物(syntactic object: SO)が解釈されるためには、例えば「その SO がどのようなものなのか?」といった情報が必要となり、その情報を提供する役割を担うのが標示(label)であると論じている。そのため、SO が転送操作によって概念・意図(conceptual-intentional: C-I)のインターフェイスへ送られる前に、当該 SO の標示が決定されなければならない。このような理由から、Chomsky (2013)において LA が想定されている。LA は概略、以下のとおりである。

(19) *Labeling Algorithm* (LA)

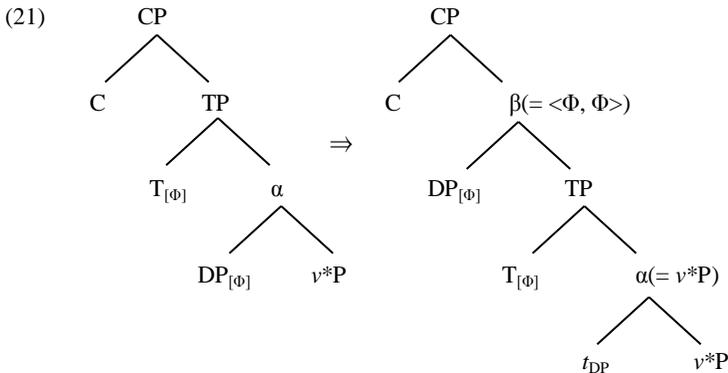
- a. LA は最小探索(minimal search)であり、一致操作等と同じく、フェイズ単位で適用される。
- b. 主要部 H と句を構成する XP が併合し、集合 $\{\alpha H, XP\}$ を構築する場合、 $\{\alpha H, XP\}$ の標示 α は H の標示となる。
- c. 共に句を構成する XP と YP が併合し、集合 $\{\beta XP, YP\}$ を構築する場合、標示が決定されない。そのため、以下の2通りの方策によって β の標示が決定される。
 - (i) XP、YP いずれかに対して IM 操作を適用することで、操作適用を受けた句(つまり、いずれかの要素のコピー)が LA に対して非可視的(invisible)となり、結果として標示 β は操作適用を受けない句の標示となる。
 - (ii) XP、YP が共有する、最も顕著な素性(the most prominent feature)がある場合には、その素性が β の標示となる。

ここで、LA の基盤となる(19b, c)の過程を、具体的な事例で概観してみよう。まず、 $\{H, XP\}$ の構造に該当する例として、(20)のように、主要部 V とそ

の補部 DP が併合した構造を考えてみる。このとき、(19b)の適用により、標示 α は V(VP)となる。⁹



次に、{XP, YP}の構造に該当する事例として、主語の TP 指定部への移動を考えてみる。(21)は他動詞文における主語 DP の IM 操作適用を示しており、当該 IM 操作が関連する部分の構造のみを記述している。まず、CP フェイズの段階において、主語 DP は v^*P の指定部に基底生成されており、当該部分の集合 $\{\alpha DP, v^*P\}$ は{XP, YP}の構造を有しているため、LA 適用の際に、標示 α が決定されない。しかしながら、主語 DP が TP 指定部への IM 操作の適用を既に受けていた場合、(19c)の(i)に従い、集合 $\{\alpha DP, v^*P\}$ 内の主語 DP が非可視的になるため、結果として v^*P が α の標示として選ばれる。更に、IM 操作の適用を受けた主語 DP は TP 指定部に生起していることになるが、実はこの部分においても集合 $\{\beta DP, TP\}$ が{XP, YP}の構造を有してしまうため、LA 適用の際に、標示 β が決定されない。しかし、主語 DP 内と TP 内には、共通する最も顕著な素性として、一致操作を行った Φ 素性を共有している。そのため、(19c)の(ii)に従い、 Φ 素性が β の標示($\langle \Phi, \Phi \rangle$)となる。本論では、以降、共有する素性 F が標示となる場合には、その標示を $\langle F, F \rangle$ という形で表記する。



Chomsky (2014)では(19)のような LA の想定に加えて、概略、(22)に示すような修正や提案の拡張を行っている。

- (22) a. IM 操作は併合操作の 1 種にすぎないため、フェイズ単位の操作ではなく、EM 操作と同様に、自由に適用できる。
- b. 従来の V は、分散形態論(Distributed Morphology)の Root(以降 R)の概念を取り入れ、R が v 等へ主要部移動(head movement)を行うことによって範疇を決定する。R のみでは標示を提供することができず、一致操作と移動を介して R の指定部に SO が併合することによって、R の標示としての機能が強化される。その結果、LA 適用後に R とその補部の集合の標示が RP となる。また英語の T も同様に、T のみでは標示を提供することができず、一致操作と移動を介して T の指定部に SO が併合することで、T の標示が強化され、LA 適用後に T とその補部を含む集合の標示が TP となる。
- c. R がフェイズ主要部 v^* へ主要部移動を行うと、 v^* が R に接辞化され、 v^* がフェイズ性を R のコピー(copy)に継承する。そのため、R のコピーがフェイズ主要部の役割を担う。フェイズ性の継承は、フェイズ主要部 C の削除によっても生じる。その際、C のフェイズ性は T に継承される。

LA と(22)の修正や想定がどのように機能するのかを具体的に見るために、(23a)の派生を考えてみよう。まず(23b)において、主要部 R の *ate* と目的語 DP の *rice* が EM の適用を受ける。(22b)から、R のみでは標示を提供できず、R の指定部に SO が併合することによって、R とその補部の集合の標示 α が LA 適用後に RP と決定される。従って、(23c)のように目的語 DP が R の指定部へ一致操作と IM 操作を行うことができれば、最終的に α の標示が決定する。Chomsky (2007, 2008)の枠組みでは、(23c)の段階での IM 操作は不可能であったが、Chomsky (2014)の枠組みでは(22a)の修正によって可能となる。次に(23d)のように、フェイズ主要部の v^* と主語 DP の *Bill* が併合し、フェイズが完成する。その際、 v^* から R へ素性継承が生じて R が一致操作を行い、また LA の適用が行われる。LA の結果、 α と β の標示がそれぞれ RP と $\langle \Phi, \Phi \rangle$

となる。更に、(23e)に示すように、転送操作の前に R の主要部移動が生じることで、(22c)に従い、 v^* が接辞化され、そのフェイズ性が R のコピーへ継承される。そのため、R のコピーがフェイズ主要部の役割を担い、R の補部を転送する。次に(23f)のように T が併合される。前述の(23c)と(22b)の議論と同じく、英語の T のみでは標示を提供できず、一致操作等を経て何らかの SO が T の指定部に併合することで、LA の段階において δ の標示が TP となる。そのため、(23g)のように主語 DP が IM 操作を行う。この IM 操作が、英語における主語の EPP 特性を説明している。つまり、英語において、TP 指定部に主語を必要とするという EPP の特性は、英語の T に関連する標示を決定する過程で生じる現象であると言える。¹⁰ その後(23h)のように C が併合し、(23d)の流れと同じく、素性継承、一致操作、LA を適用した結果、 γ 、 δ 、 ε の標示がそれぞれ、[R- v^*]、TP、 $\langle\Phi, \Phi\rangle$ となる。これによりすべての標示が決定され、転送操作後に C-I インターフェイスにおいて適切に解釈が行われる。

- (23) a. Bill ate rice. (= (11a))
- b. [α [R ate] [DP rice]]
- c. [β [DP rice] [α [R ate] t_{rice}]] (IM of rice to SPEC-R)
- d. [γ [DP Bill] v^* [β $\langle\Phi, \Phi\rangle$ [DP rice] [α $\langle RP \rangle$ [R ate] t_{rice}]]]
(EM of v^* , Bill \rightarrow Feature-Inheritance \rightarrow Agree, LA)
- e. [γ [DP Bill] [R- v^* ate- v^*] [$\langle\Phi, \Phi\rangle$ [DP rice] [RP t_{rice}]]]
(Head Movement of R \rightarrow Inheritance of phasehood \rightarrow Transfer)
- f. [δ T [γ [DP Bill] [R- v^* ate- v^*] [$\langle\Phi, \Phi\rangle$ [DP rice] [RP t_{rice}]]]] (EM of T)
- g. [ε [DP Bill] [δ T [γ t_{Bill} [R- v^* ate- v^*] [$\langle\Phi, \Phi\rangle$ [DP rice] [RP t_{rice}]]]]]
(IM of Bill to SPEC-T)
- h. [CP C [ε $\langle\Phi, \Phi\rangle$ [DP Bill] [δ $\langle TP \rangle$ T [γ $\langle [R- v^*] \rangle$ t_{Bill} [R- v^* ate- v^*] [$\langle\Phi, \Phi\rangle$ [DP rice] [RP t_{rice}]]]]]]]
(EM of C \rightarrow Feature-Inheritance \rightarrow Agree, LA \rightarrow Transfer)

このように、Chomsky (2014)の枠組みでは、EPP の特性を標示の特性に還元することが可能となっている。

更に興味深いことに、3.1 節で EKS (2012)が指摘した Chomsky (2007, 2008)

の理論的問題点は、Chomsky (2014)における、(22a)に示した IM 操作適用に関する修正によって解決される。(23f-h)の一連の派生に示されている通り、IM 操作は自由適用されるため、T の指定部へ主語 DP が移動した後に C を併合する派生が可能となり、反循環的な IM 操作を想定する必要が無い。

最後に、(22c)で言及した、フェイズ主要部 C の削除による T へのフェイズ性の継承に関して簡単に概観しよう。Chomsky (2014)はその具体的事例として、that 痕跡効果を取り上げている。That 痕跡効果とは、埋め込み節内の主語 wh 句が(24a)のように *that* を越えて移動を行う場合には非文法的となり、その一方で、(24b)のように *that* を省略すると文法的になるという現象である。

(24) a. *Who_i do you think that _{t_i} read the book?

b. Who_i do you think _{t_i} read the book?

(24a, b)における埋め込み節の構造を考えてみよう。まず(24a)の埋め込み節では、(25a)のように、wh 主語 *who* は、[R-v*]の指定部位置から、T の指定部への IM 操作の適用を受ける。これは前述の EPP の議論と同様である。次に、(25b)に示したように、埋め込み節の C (*that*)が併合する。この時、C はフェイズを形成する。2 節の(2)で提示した PIC の観点から、フェイズ主要部 C の補部となる TP は転送操作の適用を受けてしまうため、*who* が主節の要素から操作の適用を受けるためには、埋め込み節の C が併合した後に、その C の指定部 (フェイズ指定部)へ事前に *who* が移動する必要がある。つまり、埋め込み節内の CP フェイズの段階では、*who* は T の指定部への IM 操作の適用を受けた後、更に C の指定部への IM 操作の適用を受けることになる。これらの IM 操作適用後、埋め込み節内の CP フェイズの段階において LA が適用された場合、(25c)に示したように、β の標示が決定されない。まず T の指定部には *who* のコピーしか残っておらず、(19c)の(i)に従い、*who* のコピーは LA に対して非可視的となる。そのため、β の標示に関しては T のみが可視的となるのだが、(22b)に記述した通り、英語の T のみでは標示を提供することができない。従って β の標示が決定されず、C-I インターフェイスにおいて適切に解釈されないため、非文法的となる。

(25) a. [β who [T [_α _{t_{who}} [R-v* read-v*][<Φ, Φ> [DP the book] [RP ...]]]]]

(IM of *who* to SPEC-T)

- b. [_δ who [_γ C-that [_β t_{who} [T [_α t_{who} [R-ν* read-ν*]]<Φ, Φ> [DP the book] [RP ...]]]]]]]] (EM of C → IM of *who* to SPEC-C)
- c. [_δ who [_γ C-that [_{β(=?)} t_{who} [T [_{α(=[R-ν*])} t_{who} [R-ν* read-ν*]]<Φ, Φ> [DP the book] [RP ...]]]]]]]] (Feature-Inheritance → Agree, LA → Transfer) (→ (24a))

(24b)の埋め込み節の場合、(25a)と同じく(26a)まで構造構築を行った後、(26b)に示したように、埋め込み節のCが併合した際、主語位置で*who*が留まっていると想定する。その後、LAの適用を受け、(26c)のようにβの標示が<Φ, Φ>と決定される。その後(26d)のようにCが削除されると、(22c)に従い、Cのフェイズ性がTへと継承される。そのため、Tの補部である、[R-ν*]が転送操作の適用を受ける。この時、Tの指定部に留まっていた*who*は、転送操作の適用を受けないため、より上位の要素からの操作の適用を受けることが可能となる。また、この*who*が更に移動する場合に、βに提供された<Φ, Φ>の標示が崩れてしまうのではないか、という疑問が生じるかもしれない。この疑問に対しては、Chomsky (2014: 8)は、既にLAによって決定された標示に関しては、その情報を後の操作に利用可能であり、尚且つその標示も保持されると想定している。この想定に沿えば、(26d)において、Tの指定部にある*who*は、既にLAの適用を(26c)の段階で受けているため、その後移動しても<Φ, Φ>の標示を崩すことはない。

- (26) a. [_β who [T [_α t_{who} [R-ν* read-ν*]]<Φ, Φ> [DP the book] [RP ...]]]]]] (IM of *who* to SPEC-T)
- b. [_γ C-that [_β who [T [_α t_{who} [R-ν* read-ν*]]<Φ, Φ> [DP the book] [RP ...]]]]]]]] (EM of C)
- c. [_{γ(=CP)} C-that [_{β(<Φ, Φ>)} who [T [_{α(=[R-ν*])} t_{who} [R-ν* read-ν*]]<Φ, Φ> [DP the book] [RP ...]]]]]]]] (Feature-Inheritance → Agree, LA)
- d. [_{γ(=CP)} ~~C that~~ [_{β(<Φ, Φ>)} who [T [_{α(=[R-ν*])} t_{who} [R-ν* read-ν*]]<Φ, Φ> [DP the book] [RP ...]]]]]]]] (C-deletion → Inheritance of phasehood → Transfer) (→ (24b))

このように Chomsky (2014)では、併合操作の自由適用を想定することで

EKS (2012)の指摘した反循環的な IM 操作も排除し、更に LA を修正することで、EPP の特性だけでなく、that 痕跡効果に関しても、標示の問題に還元している。

4.2 提案と経験的問題点の解決

4.1 節の(22c)をもう少し詳しく検討してみよう。(22c)の想定は、フェイズ主要部 v^* への R の主要部移動によって、フェイズ性が v^* から R のコピーに継承されるというものであった。簡潔に図示すると、(27a, b)のように表せる。フェイズ主要部の役割を担った R のコピーは、その補部を転送する。

- (27) a. $[_\gamma \text{ DP}_1 [v^*(\text{Phase Head})] [_\beta \text{ DP}_2 [{}_\alpha \text{ R } t_{\text{DP}_2}]]]$
 b. $[_\gamma \text{ DP}_1 [[R-v^*] [_\beta \text{ DP}_2 [{}_\alpha t_{\text{R}}(\text{Phase Head})] t_{\text{DP}_2}]]]$

このフェイズ性の継承を、フェイズ指定部の観点から踏まえて考えると、(28a, b)のように表すことができる。(28a)のように、主要部移動を行う前の段階では、 v^*P 指定部の位置に生起する DP_1 がフェイズ指定部となるはずであったが、主要部移動によって v^* のフェイズ性が R のコピーへ継承されると、 DP_1 はもはやフェイズ指定部ではなくなり、(28b)のように、R のコピーの指定部である DP_2 がフェイズ指定部として機能することになる。更に言えば、Chomsky (2014)では、R の v^* への主要部移動は普遍的であると想定されているため、 v^*P フェイズ単位では、必ず DP_2 の位置がフェイズ指定部となる。

- (28) a. $[_\gamma \text{ DP}_1(\text{Phase Edge}) [v^*(\text{Phase Head})] [_\beta \text{ DP}_2 [{}_\alpha \text{ R } t_{\text{DP}_2}]]]$
 b. $[_\gamma \text{ DP}_1 [[R-v^*] [_\beta \text{ DP}_2(\text{Phase Edge})] [{}_\alpha t_{\text{R}}(\text{Phase Head})] t_{\text{DP}_2}]]]$

この想定が正しく、且つ Chomsky (2008)が提案した、フェイズ指定部からの抜き取りが許されないという分析が正しいならば、3.2 節で指摘された経験的問題点の一部が解決可能となる。

(29) *Spanish* (= (15))

- | | | | | | | |
|----|-----------------|-----------------|------------------------------|----------------|---------------|---|
| | $[_{\text{CP}}$ | De qué | conferenciantes _i | C te | parece | que ... |
| | | of what | speakers | CL-to.you | seem-3.SG | that |
| a. | ...? | $[_{\text{TP}}$ | me | van | a impresionar | $[_{v^*P} [[\text{las propuestas } t_i]]]] ?$ |
| | | CL-to.me | go-3.PL | to impress-INF | the proposals | |

- b. ...*[_{TP} [las propuestas t_i] me van a impresionar [_{v*P} t_j]]?
the proposals CL-to.me go-3.PL to impress-INF

‘Which speakers does it seem to you that the proposals by will impress me?’

(30) Dutch (= (16))

- a. [_{CP} Wat_i C hebben [_{TP} er T [_{v*P} [t_i voor mensen] je moeder
what have-3.PL EXP for people your mother
bezocht]]]]?

visited

- b. *[_{CP} Wat_i C hebben [_{TP} [t_i voor mensen]_j T [_{v*P} t_j je moder
what have-3.PL for people your mother
bezocht]]]]?

visited

‘What sort of people have visited your mother?’

3.2 節において、スペイン語とオランダ語では、(29a)、(30a)のように、 v^*P 指定部内にとどまる主語 DP からの wh 句の抜き取りが許されることを概観した。この位置は、(28)における、 DP_1 に相当する位置である。前述の議論のとおり、 v^*P フェイズの派生段階においては必ず主要部移動が生じ、フェイズ主要部の役割が v^* から R のコピーへ継承されるとするならば、 v^*P 指定部内に生起する要素はフェイズ指定部ではなくなる。そのため、本論の提案を想定すれば、CP フェイズの段階において、 v^*P 指定部内から wh 句の抜き取りを行うことは問題なく可能となる。

しかしながら、(29b)、(30b)に関しては、本論の提案では説明できない。Chomsky (2014) の提案では、以前まで想定されていた IM 操作の同時適用は無い((22a)を参照)ため、(29b)や(30b)の主語からの、wh 句の抜き取りは、主語が v^*P 指定部に生起している段階で行われるのではなく、TP 指定部へ主語が移動した後に行われることになる。その一方で、TP 指定部はフェイズ指定部の位置ではない((22c)を参照)。例えば(30b)のオランダ語の派生は、Chomsky (2014) の想定で考えると、(31)のように、 v^*P 指定部に生起していた主語が TP 指定部へ IM 操作によって移動した後に C が併合し、その後 CP 指定部へと

主語内の wh 句 *wat* が CP 指定部まで移動する。しかし、C に関するフェイズ性の継承は、C が削除された場合であるため、そのような削除が適用されない(31)では、C がそのままフェイズ主要部ということになり、フェイズ指定部も変わらず CP 指定部となる。そのため、TP 指定部内からの抜き取りは可能となり、事実と反して文法的であると予測してしまう。この問題点に関しては、次節で扱う。

(31) [_{CP} Wat_i (Phase Edge)[C(Phase Head) [_{TP} [_{t_i} voor mensen]_j [T [_{v^{sp}}t_j je...]]]]

バスク語の目的語内からの抜き取りが許されない事実(32a)は説明が可能である。

(32) *Basque* (= (18))

- a. * [_{CP} Noren_i C ikusi ditu [_{t_i} argazkiak] Jonek]?
 who-GEN see AUX pictures-ABS John-ERG
 ‘Of whom has John seen pictures?’
- b. [_{CP} [Noren argazkiak]_i C ikusi ditu t_i Jonek]?
 who-GEN pictures-ABS see AUX John-ERG
 ‘Pictures of whom has John seen?’

(22b)の想定や(23c)の派生で概観したように、R 自体が標示を提供する要素として弱いことから、目的語等の SO が R の指定部へ移動することで結果的に R を含む集合の標示が RP となる。バスク語でも同様に、R の指定部に目的語が移動していると想定する。この想定が正しいならば、(28b)の図から、バスク語の目的語は DP₂ の位置に移動していることとなる。(28b)の DP₂ の位置は主要部移動によって新しくフェイズ主要部になっている位置である。従って、(31a)に示したバスク語の目的語位置からの抜き取りはフェイズ指定部内からの抜き取りとなってしまう、抜き取りが許されないと説明できる。¹¹

このように、Chomsky (2014)のフェイズの枠組みを用いれば、Chomsky (2008)の経験的問題点の一部はフェイズ指定部の特性に還元でき、逆に Chomsky (2008)で提示された分析が基本的には正しいことを示す証拠となる。

5. 主語の島効果

本論の提案では、前節の(29a)、(30a)といった、 v^*P 指定部に主語が生じたままの事例は説明可能であるが、(29b)、(30b)のように、主語が TP 指定部へ移動した場合に抜き取りが不可能であるという事実は捉えられない。これは英語の主語の島効果も同様である。(33a)に示した英語の主語の島効果が生じている事例は、Chomsky (2008)のみの分析では、フェイズ指定部の特性によって説明可能であったが、Chomsky (2014)の枠組みを踏まえた本論の提案では、R の主要部移動によって v^*P 指定部がフェイズ指定部ではなくなり、また IM 操作の同時適用も想定されていないため、(33b)のような wh 句移動を行うことになる。このとき、TP 指定部はフェイズ指定部ではないため、wh 句の抜き取りは許され、事実に反し容認可能な文と判断されてしまう。

(33) a. *Who did stories about *t* terrify John? (= (1))

b. [who_i(Phase Edge) [C(Phase Head) [_{TP} [stories about who_i]_j [_T [_{v^{*P}} *t_j* ...]]]]]

本節では、英語の主語の島効果を中心に議論を進め、Chomsky (2014)の想定を更に修正し、本論の提案とは独立した一般化によって説明を試みる。

まず、C から T へのフェイズ性の継承に関して修正を加える。Chomsky (2014)では、C の削除によって C のフェイズ性が T へ継承されると想定されている。しかし本論では、R から v^* への主要部移動によるフェイズ性の継承と同様に、Pesetsky and Torrego (2001)等で提案されている、T から C への主要部移動(T-to-C Movement)でも、フェイズ性の継承が生じると想定する。この想定により、(33b)は(34)のように、C から T へフェイズの役割が継承され、それに応じてフェイズ指定部も CP 指定部から TP 指定部へ移行する。主要部移動後、T の補部が転送される。

(34) [who_i [[C-T] [_{TP} [stories about who_i]_j](Phase Edge) [_{t_j}(Phase Head) [_{v^{*P}} *t_j* ...]]]]]

ここで、(34)の wh 句の移動を検討する。(34)における *who* の移動は A'移動と呼ばれている。更に通例、A'移動は、Nissenbaum (2000)等で、フェイズ指定部を経由して移動を行うと論じられている。つまり、「A'移動の場合は一般

的に、移動の元位置と移動先の間には、必ずフェイズ主要部が存在する」ことになる。更なる検証が必要ではあるものの、この一般化がChomsky (2014)のフェイズの枠組みでも成り立つのであれば、(34)における *who* の移動は、Cのフェイズ性の消失により、移動の元位置と移動先との間にフェイズ主要部が存在しないことになる。¹²

本節での提案は、提示した一般化や T から C への主要部移動に関して更なる議論が必要となるため、まだ推測の域を出ないが、もし本節で提示したこれらの想定が正しいならば、主語の島効果はフェイズ指定部の特性とは独立した現象として説明できる可能性がある。

6. 結論

本論では、主語の島効果の説明を行った Chomsky (2008)の分析における理論的問題点や経験的問題点が、Chomsky (2014)のフェイズの枠組みで捉えなおすことによって一部解消されることを示し、Chomsky (2008)が示したフェイズ指定部の特性に関する分析は十分支持され得るものであるということを論じた。一方で、主語の島効果そのものに関しては、本論で提案した、Chomsky (2014)の枠組みを踏まえたフェイズ指定部の特性に関する分析だけでは説明ができないことを主張した。この主語の島効果の説明に関して、本論では主要部移動によるフェイズ性の継承と A'移動の特徴から導き出される一般化に還元することを提案した。本論で提案した一般化の妥当性に関しては、今後の更なる研究を要するが、もしこの一般化が正しいとすれば、主語の島効果は、フェイズ指定部の特性を用いた分析とは独立して説明が可能となる。

註

* 本論文作成にあたり、九州大学の西岡宣明先生より、示唆に富む大変有益なご指摘をいただいた。特記して感謝の意を表したい。また、本論文中的内容及び例文等の不備は、全て筆者の責任である。

1 本論では、Chomsky (2004)以降の主張に沿い、フェイズ主要部を C と v^* とする。また、Chomsky (2007)において、DP を補部とする n^* がフェイズ主要部となる可能

性が示唆されているが、本論ではこの可能性の是非に関しては立ち入らない。

2. フェイズ主要部から下位の主要部への、解釈不可能素性の継承が生じる理論的根拠には、Richards (2007)によって論じられている。Richards (2007)によれば、ある解釈不可能素性が、対象となる解釈可能素性と一致を引き起こした際、解釈不可能素性の値(value)が対象の解釈可能素性の値と同じになってしまう、統語上、次のフェイズの段階において、他の解釈可能素性とは見分けがつかなくなってしまうと論じている。仮にフェイズ主要部位置に、解釈可能な素性と値が同じになった解釈不可能素性がある場合、フェイズ主要部は次のフェイズの段階において転送されるため、当該解釈不可能素性も次のフェイズの段階にて転送されることとなる。次のフェイズが形成された段階では、当該解釈不可能素性は解釈可能な素性と統語上見分けができない状態にあるので、当該解釈不可能素性がそのまま音と意味のインターフェイスへ転送されることになり、結果としてインターフェイス条件の1つである、完全解釈の原理に違反してしまうことになる。その一方で、もし解釈不可能素性がフェイズ主要部から下位の主要部へと継承されると想定すれば、当該解釈不可能素性は当該フェイズの範囲内において適切に削除され、完全解釈の原理に違反しないことになると論じている。
3. 本論では、Koopman and Sportiche (1991)などに代表される動詞句内主語仮説 (VP-internal Subject Hypothesis)を援用し、他動詞などの主語は v^*P 指定部に基底生成され、TP 指定部へと移動すると想定する。
4. TP 指定部に位置する主語の *wh* 句が CP 指定部まで移動しているという可能性を示唆する証拠としては、Pesetsky and Torrego (2001) や古川・福田 (2009)において、*wh* 疑問詞を強調する *the hell* の事例が挙げられている。Wh 疑問詞を強調する *the hell* は(i)と(ii)の対比から、CP 指定部にある *wh* 疑問詞に隣接していなければならないという特徴がある。興味深いことに、*wh* 主語の疑問文においても、(iii)に示したように、*wh* 主語の *who* に隣接して *the hell* が生起可能である。このことから、(iii)における *wh* 主語 *who* は、CP 指定部に生起している可能性も支持される。
 - (i) a. [_{CP} What_i the hell [_C C-did [_{TP} Sue give _{t_i} to whom]]]?
 - b. [_{CP} Who_i the hell [_C C-did [_{TP} Bill meet _{t_i} where]]]?
 - (ii) a. *[[_{CP} What_i [_C C-did [_{TP} Sue give _{t_i} to [whom the hell]]]]]?

b. *_{CP} Who_i [_C C-did [_{TP} Bill meet _{t_i} [where the hell]]]?

(iii) Who the hell bought what?

5. EKS (2012)ではこの反循環的な TP 指定部への IM 操作を捉えるために、主語 DP を実際に別の T へ併合させ、TP を 2 つ構築する分析を展開しているが、本論では後述の Chomsky (2014)の枠組みを採用する。4 節で言及するように、Chomsky (2014)はフェイズ主要部 C の併合操作を行う前に、主語の IM 操作を適用する枠組みを採用することで、EKS (2012)の指摘した反循環的な IM 操作の理論的問題を解決している。
6. 特に、(13b)と(14)の文法性判断の差は大きく、更なる調査が必要であるため、本論では以降、受動化された主語からの抜き取りに関しては扱わず、稿を改めることとする。
7. Chomsky (2007: 20)では、フェイズ主要部 C と主要部 T の指定部への IM 操作の同時適用が可能であるのと同様に、フェイズ主要部 v^* と主要部 V の指定部への IM 操作の同時適用も可能であることを論じている。本論では、(17b)はこの議論に準じ、IM の同時操作を適用した結果の派生を示している。
8. Chomsky (2014)では that 痕跡効果を空範疇原理(Empty Category Principle: ECP)の具体的事例として提示している。しかしながら、本論では ECP 全体の議論に関しては立ち入らず、フェイズ性の継承に関する議論の中心となる、that 痕跡効果の分析のみを概観する。
9. (19a)に示す通り、LA の適用はフェイズ単位で行われるため、正確に言えば、(20)は[V DP]の構造が構築された後に LA の適用を受けるのではなく、当該構造の派生が進み、フェイズが完成した段階で LA が適用される。本論では議論の簡潔化のために、[V DP]の構造部分が LA の適用を受けた場合の{V, DP}の標示がどのように計算されるかのみを明示している。また、(20)における LA の結果は、(19b)に従い、V が標示となるが、これは従来の VP に相当する。そのため、(20)では α の標示を V(VP)と表記している。しかしながら、本論では主要部と句の標示をより明確に示し、議論の複雑さを避けるため、以降、従来通りの表記法を用いて表記を行うこととする。
10. Chomsky (2014)は、英語の T が、それ自身のみでは標示を提供できないと主張する一方で、イタリア語の T は標示としての機能を果たすことができると論じてい

る。そのため、イタリア語では T の指定部に SO を併合する必要が無く、それゆえ主語の EPP 特性も生じないと主張している。

11. 本論の提案では、英語の場合は問題となる可能性がある。というのも、3.2 節で概観したように、非特定の目的語内からの抜き取りは、英語の場合は問題ないからである。

(i) Who_i did you see [a picture of t_i]? (= (17a))

この問題点を解決する 1 つの可能性として、目的語全体が R の指定部へ移動するのではなく、その代わりに wh 句のみが R の指定部へ移動するという方策が考えられる。(i)の目的語 DP 内にある wh 句 *who* のみを R の指定部へ移動させることにより、目的語 DP の代わりに、同じく DP の性質を有する *who* が R の標示としての弱さを補完することが可能であるならば、(i)における wh 句の抜き取りが許される。Chomsky (2008)のフェイズ指定部の特性では、フェイズ指定部全体を移動させることは問題ないと想定されているため、R の指定部に *who* が移動した後も、*who* の CP 指定部への移動は可能である。興味深いことに、英語でも目的語内からの抜き取りが許されない事例があり、(ii)に示したように、目的語全体が移動していると思われる例では、その中から wh 句を抜き取ることができない。本論での提案を拡張し、(ii)において、*call* と *up* の間の位置に R の指定部位置が生じていると想定するならば、(ii b)の目的語位置がフェイズ指定部となり、抜き取りが許されないと説明できる。逆に、(ii a)の目的語 DP 内からの wh 句の抜き取りが許されることに関しては、wh 句のみが R の指定部に移動し、R の標示の弱さを補完ことができると想定するならば、説明可能である。

(ii) a. Who_i did Mary call up [friends of t_i]?

b. ?*Who_i did Mary call [friends of t_i] up t_i? (Lasnik (2001: 111))

しかしながら、この想定には大きな問題点が残る。というのも、Chomsky (2013, 2014)では、R の指定部へは通例、一致操作の適用を受けた要素が移動し、R と一致した移動要素が共有する Φ 素性が、LA の結果 $\langle \Phi, \Phi \rangle$ の標示を算出すると想定されているからである。この点に関しては、今後の研究の課題としたい。

12. (34)における、TP 指定部内から C の指定部への *who* の IM 操作適用は、T の主要部移動が生じているため、本論での提案と同じく、フェイズ指定部からの抜き取

りであるとして排除できると考えることが可能であるかもしれない。しかしながら、厳密に Chomsky (2014)に従えば、T から C への主要部移動は、LA 適用後に生じるため、TP 指定部内の *who* が C の指定部への IM 操作の適用を受ける時点では、T は C のフェイズ性を継承しておらず、TP 指定部はフェイズ指定部として機能していないことになる。そのため、(34)における主語の島効果の事例は、本論で主張している通り、フェイズ指定部の特性として還元することはできない。

参考文献

- Broekhuis, Hans (2005) "Extraction from Subjects: Some Remarks on Chomsky's 'On Phases'," *Organizing Grammar: Linguistic Studies in Honor of Henk van Riemsdijk*, ed. by Hans Broekhuis, Norbert Cover, Riny Huybregts, Ursula Kleinhenz and Jan Koster, 59-68, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Chomsky, Noam (1973) "Conditions on Transformations," *A Festschrift for Morris Halle*, ed. by Stephen Anderson and Paul Kiprasky, 232-286, Holt, Rinehart and Winston, New York.
- Chomsky, Noam (1977) "On Wh-Movement," *Formal Syntax*, ed. by Peter W. Culicover, Thomas Wasow and Adrian Akmajian, 71-132, Academic Press, New York.
- Chomsky, Noam (1986) *Barriers*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (1993) "A Minimalist Program for Linguistic Theory," *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvain Bromberger*, ed. by Kenneth Hale and Samuel J. Keyser, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2000) "Minimalist Inquiries: The Framework," *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka, 89-156, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2001) "Derivation by Phase," *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2004) "Beyond Explanatory Adequacy," *Structures and Beyond: The Cartography of Syntactic Structures, Volume 3*, ed. by Adriana Belletti, 104-131, Oxford

- University Press, Oxford.
- Chomsky, Noam (2007) “Approaching UG from Below,” *Interfaces + Recursion = Language?: Chomsky’s Minimalism and the View from Syntax-Semantics*, ed. by Uli Sauerland and Hans-Martin Gärtner, 1-30, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Chomsky, Noam (2008) “On Phases,” *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, ed. by Robert Freidin, Carlos P. Otero and Maria L. Zubizarreta, 133-166, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2013) “Problems of Projection,” *Lingua* 130, 33-49.
- Chomsky, Noam (2014) “Problems of Projection: Extensions,” Manuscript, MIT.
- Epstein, Samuel D., Hisatsugu Kitahara, and T. Daniel Seely (2012) “Structure Building That Can’t Be,” *Ways of Structure Building*, ed. by Maria Uribe-Etxebarria and Vidal Valmala, 253-270, Oxford University Press, Oxford.
- 古川 武史・福田 稔 (2009) 「空移動仮説について」, 『宮崎公立大学人文学部紀要』第 16 巻 第 1 号, 265-279.
- Gallego, Ángel J. (2010) “Subextraction from Phase Edges,” *The Complementizer Phase: Subjects and Operators*, ed. by E. Phoevos Panagiotidis, 51-75, Oxford University Press, Oxford.
- Gallego, Ángel J. and Juan Uriagereka (2007) “Conditions on Sub-extraction,” *Coreference, Modality, and Focus: Studies on the Syntax-Semantics Interface*, ed. by Luis Eguren and Olga Fernández-Sorinao, 45-70, John Benjamins, Amsterdam.
- Koopman, Hilda and Dominique Sportiche (1991) “The Position of Subjects,” *Lingua* 85, 211-258.
- Lasnik, Howard (2001) “Subjects, Objects, and the EPP,” *Objects and Other Subjects: Grammatical Functions, Functional Categories and Configurationality*, ed. by William D. Davis and Stanley Dubinsky, 103-121, Kluwer, Dordrecht.
- Nissenbaum, Jonathan (2000) *Investigations of Covert Phrase Movement*, Doctoral dissertation, MIT.
- Pesetsky, David and Esther Torrego (2001) “T-to-C Movement: Causes and Consequences,” *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowics, 355-426, MIT Press,

Cambridge, MA.

Ricahrds, Marc D. (2007) "On Feature Inheritance: An Argument from the Phase Impenetrability Condition," *Linguistic Inquiry* 38, 563-572.

Ross, John R. (1986) *Infinite Syntax!*, Ablex, Norwood, NJ.

Stepanov, Arthur (2007) "The End of CED? Minimalism and Extraction Domain," *Syntax* 10, 80-126.

Takahashi, Daiko (1994) *Minimality of Movement*, Doctoral dissertation, University of Connecticut.

Uriagereka, Juan (1988) *On Government*, Doctoral dissertation, University of Connecticut.

Uriagereka, Juan (1999) "Multiple Spell-Out," *Working Minimalism*, ed. by Samuel D. Epstein and Norbert Hornstein, 251-282, MIT Press, Cambridge, MA.